

北票・喇嘛洞墓地出土「人面飾金具」考

黒崎 直

1 はじめに

北票喇嘛洞墓地は、遼寧省北票市南八郷四家板村喇嘛洞に所在し、これまで中国北方地域で発掘された三燕文化(4世紀～5世紀)の墓地遺跡の中でも、最大規模を有するものの一つである。調査は1993年秋から1998年冬までの5年余にわたって実施され、計435基の墓が発掘された。このうち三燕期の墓は420基の多数を占め、当該期の貴重な遺物が多数発見されている。長期にわたる調査を担当した遼寧省文物考古研究所およびそれに協力した朝陽市博物館と北票市文物管理所の関係各位に、大いに敬意を表したい。

北票喇嘛洞墓地は、墓の規模によって大・中・小の3種に分けられるという。大型墓であるI区のM5墓(以下では「I区」を省略しM5、M10などと表記)を例にとると、墓壙は長5m、幅4m、深さ4m前後の規模を有し、埋土内に陶罐1点が埋納されていた。また木棺は長3.5m、幅1.3m、高さ0.8mの大きさで、ほぼ45度振った方位で配置されている。棺内の人骨については、大半腐朽していたものの、北東に頭位をおくことは復元できる。副葬品は比較的豊富で、陶器、銅製容器、銅製馬具と鉄製武器、鉄製甲冑など170点(組)以上が出土している。また中型墓についてはM9墓を例にとると、墓壙は長4.3m、幅1.9m、深さ2.7m。小型墓の墓壙長は、2.5m以下である。これら大・中・小の墓とも、「土壙堅穴木棺墓」と呼ばれる構造が大半を占めており、中・小墓の中には石棺墓が少数存在する。ただしいずれの墓も、その上半部分は激しく削平をこうむっており、本来的に封土などが存在したものか否かは判断できないと報告されている(遼寧省文物考古研究所2002、pp.13-15)。

これらの墓は仰臥伸展の一次葬で、頭は東、足は西に置くのを原則とする。墓壙中に数点の陶器を埋置するが、他の多くの副葬品は棺内に埋納されている。陶器、漆器、環頭鉄器などは頭の前に置き、武器は常に体の脇に置く。また銅製容器の多くは胸よりも下半に、銅製馬具や鉄製用具類はすべて足もとに置くなど、一定の傾向がうかがえる。

喇嘛洞墓は4世紀初めから5世紀にかけて造営されたもので、三燕文化の盛期にほぼ一致する。とくに大型墓であるM5墓やM17墓から発見された甲騎具装一式は、副葬品中のまさに白眉であり、中国遼西地域における三燕文化の特色をよく物語っている。しかし一方では、長方形の墓壙が多く、しかも埋土中に陶器を置くなどの現象は、他の三燕墓にはみられない

特徴でもある。そして本稿で取り上げる「人面飾金具」もまた、環頭鉄器や銅製鹿形飾などとともに、これまで他の墓から発見されたことのない遺物である。ここに喇嘛洞墓としての独自の特色を見いだすことができる(遼寧省文物考古研究所2002)。

本稿で取り上げる「人面飾金具」とは、喇嘛洞墓の木棺内から発見された人面を形どった金銅製の薄板である(図版2)。調査関係者からの聞き取りによれば、発掘調査によって20数点は出土したものとみられるが、実際に実物が観察できたのは11点である。しかし、埋葬状況の一例として掲載されたM5墓の様子(図1)からは、同一棺内から7～8点の出土がうかがえるし、これらとは別の1点(M10墓出土)が『三燕文物精粹』(遼寧省文物考古研究所2002)の図版91-107に掲載されている。また1994年11期の『文物』には、1988年に喇嘛洞村の一隅から土取り作業に伴って古墓から発見されたという「人面飾金具」1点が紹介されている(田・李1994)。このようにおそらく喇嘛洞墓地全体で20数点の出土は見込めるであろうが、以下では実測図・写真等の資料が入手できた13点(表1参照)を対象に、分類と用途の推定、およびその性格などについて考察を加えていきたい。

2 人面飾金具の分類

「人面飾金具」については、『三燕文物精粹』の図版解説142-107に以下のような記載がある。すなわち「完存。板状、楕円形で表面は型押しによる突線で五官を表現する。両側に耳があり、上下にそれぞれ一つの小孔がある。出土位置から、もとは棺内の両側板上に釘で打ち付けられていたのであろう。長さ10.5cm、高さ10.4cm」。これにより「人面飾金具」の大きさや形状および用途の一端をうかがうことができる。

「人面飾金具」の出土状況は今一つつまびらかでないが、先述した喇嘛洞M5墓の平面図(遼寧省文物考古研究所2002)によれば、頭部付近の両側壁に接するように出土した人面飾金具

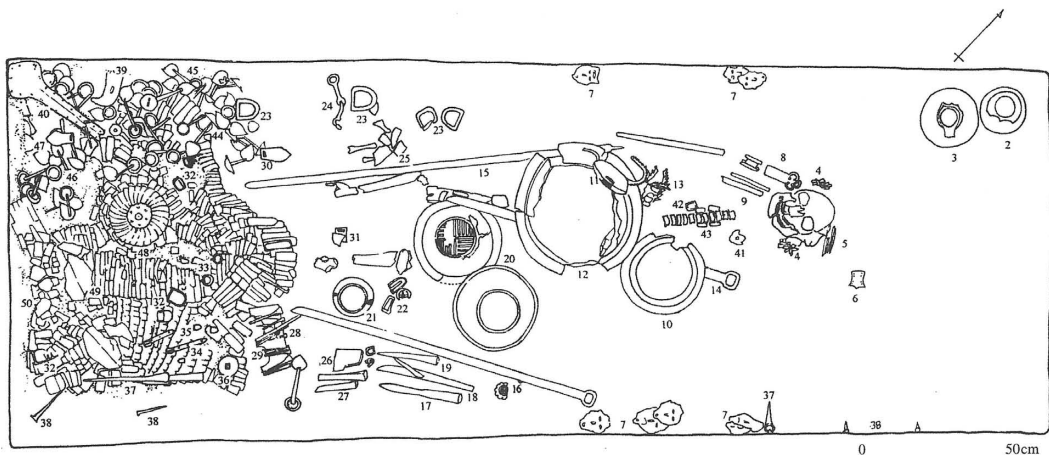


図1 喇嘛洞 I M5墓平面図(遼文考研2002、p. 7 に拠る)

が、東側壁に沿って5点、西側壁に沿って3点の計7～8点確認できる(図1参照)。1つの棺から1点のみが出土するのではなく、複数、それも5点以上の数がまとまって出土する傾向がうかがえる。これは「人面飾金具」の用途を考える上で、貴重な手がかりとなるものである。このことについては、後に触れる。

「人面飾金具」を型式分類するにあたっては、前記の解説文にある「五官」が参考になる。この「五官」とは、『広辞苑』(岩波書店)によれば、「五感を生ずる五つの感覚器官。眼(視覚)・耳(聴覚)・鼻(嗅覚)・舌(味覚)・皮膚(触覚)をいう(後略)」とある。「人面飾金具」には、舌の直接的な表現はないようであるが、口は大半のものに認められるので、その意味でこの「人面」はまさしく「五官」を表現しているといえる。それに加えて頭髮や髭の表現もあり、口の表現にも個々に特徴が認められる。すなわち分類する上での手がかりは数多い。これらの特徴を整理しながら、分類を試みてみよう。

まず、顔全体の形状とその両側に作る耳の形状から、「人面飾金具」を大きく2つに分類することができる。すなわち「楕円形を呈する顔の両側に小型の耳をもつもの(Ⅰ)」と、「略円形を呈する顔の両側に大型の耳を作り出したもの(Ⅱ)」との区別である。前者(Ⅰ)を「小判形」、後者(Ⅱ)を「ウサギ耳」とも仮称しよう。「小判形」には1～12の12点が含まれ、「ウサギ耳型」にはM25墓から出土した13が該当する(図2参照)。

次いで、目の形状に注目してみると、以下の3つのタイプが注意される。すなわち目尻が上がる「つり目」(A)と、水平な目を表現する「ひら目」(B)、目を細い線刻で表現した「ほそ目」(C)の3種である。「つり目」タイプのAにはM5・M10および『文物』報告の墓から出土した1～4の4点が該当し、またM25墓から出土した「ウサギ耳」の13もこのAに分類できる。「ひら目」タイプのBにはM6・M10・M16墓から出土した5～7の3点が該当し、「ほそ目」タイプのCにはM17墓から出土した8～12の5点が該当する。

「五官」の表現方法、とくに顔の輪郭や耳・目の形状を手がかりに「人面飾金具」の分類を試みたが、その結果、ⅠA(小判形つり目)、ⅠB(小判形ひら目)、ⅠC(小判形ほそ目)、ⅡA(ウサギ耳つり目)の4種が抽出できた。ただし「五官の表現」と例えられるように、口や頭髮、髭など他の部位の表現においても、いくつかの差異を認めることが可能である。上記4種の分類がそれらといかに関わるのか、簡単にまとめておこう。

まず、口の表現についてみれば、「不明瞭(0)」なものや「横一文字(1)」に作りだすもの、「四角い圏線(2)」で表現するものなどの差があり、(2)ではさらに圏線の中を「井桁(2-1)」や「点々(2-2)」で飾るものなどの細分が可能である。

それは頭髮についても同様で、頭部正中線から「左右に分ける(a)」と「放射状線(b)」や「横一直線(c)」で表現するものがあり、左右分けタイプでは頭髮を緩くカーブする曲線で表現するもの(a-1)と、直線的に表現するもの(a-2)との差がある。また髭についても、それを表現するものとししないものとの差が認められるようだ。

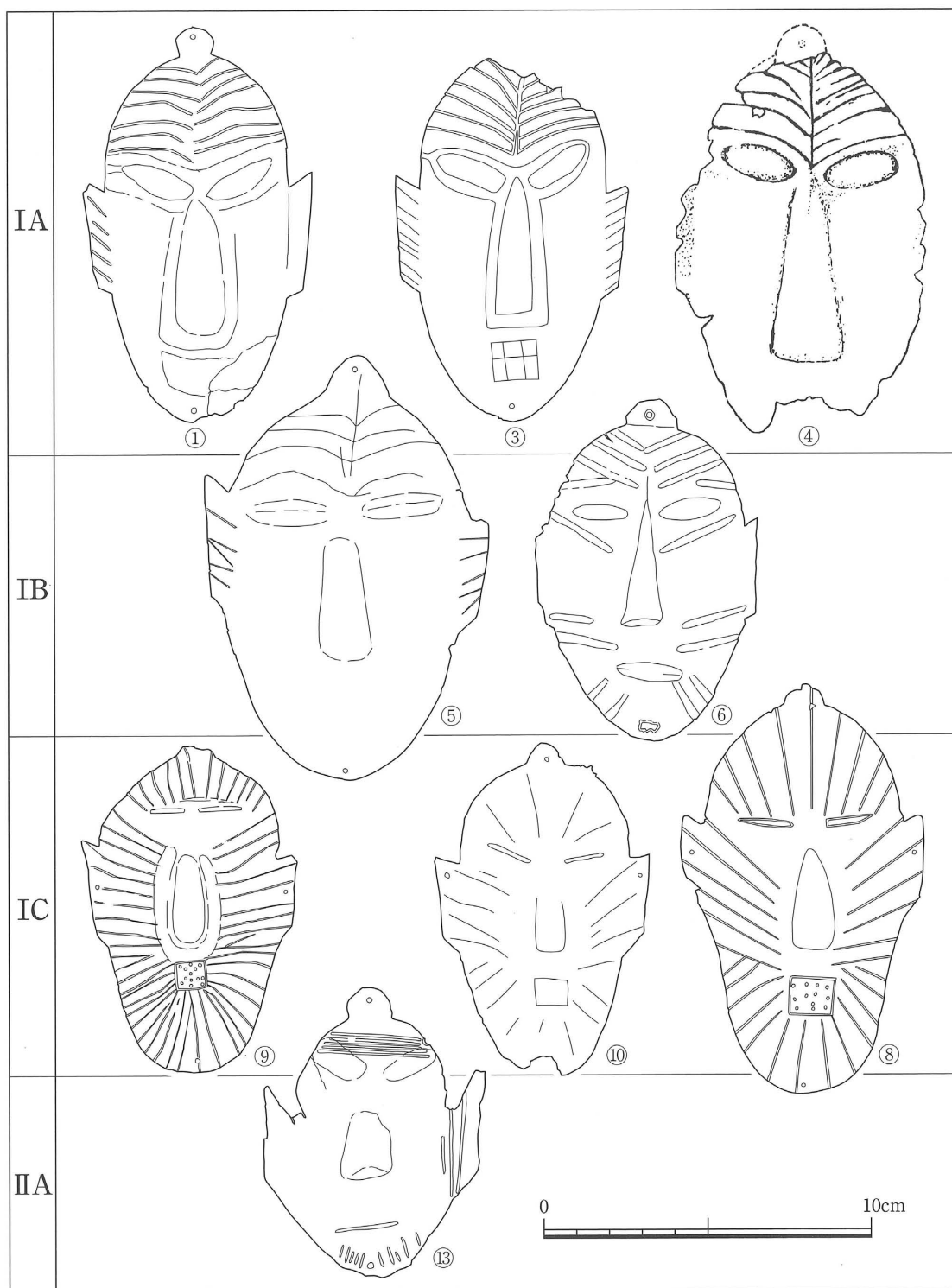


図2 「人面飾金具」各種とその分類

表1 「人面飾金具」観察分類表

No.	長cm	幅cm	厚mm	重量g	目	鼻	口	頭 髪	髭	釘 孔	出土墓	そ の 他	分 類
1	12.2	7.0	0.7	17.9	押出	押出	横一文字?	曲線 (左右分)	なし	上下	I M10	裏面に布付着 挿図(1/3)から観察	I A1a-1
2	11.8	7.1	0.9	19.0	押出	押出	横一文字	曲線 (左右分)	有	上下	I M10		I A1a-1
3	11.1	7.0	0.6	16.3	押出	押出	四角 (格子)	曲線 (左右分)	なし	上下	I M5		I A2-1a-1
4	12.0	7.5	?	?	押出	押出	不明瞭	曲線 (左右分)	なし	上下	?		I A0a-1
5	13.0	8.7	0.7	25.9	押出	押出	不明瞭	曲線 (左右分)	なし	上下	I M6	凹凸面逆転か	I B0a-1
6	10.6	6.8	0.4	10.8	押出	押出	横一文字	直線 (左右分)	有	上下	I M16		I B1a-2
7	10.5	7.0	?	?	押出	押出	横一文字	直線 (左右分)	有	上下	I M10	写真から観察	I B1a-2
8	12.5	7.5	0.5	13.2	線状	押出	四角 (点々)	直線 (放射状)	有	上下左右	I M17		I C2-2b
9	10.2	6.7	0.5	9.0	線状	押出	四角 (点々)	直線 (放射状)	有	上下左右	I M17		I C2-2b
10	10.3	6.5	0.6	11.0	線状	押出	四角	直線 (放射状)	有	上下左右	I M17		I C2b
11	8.0	6.2	0.4	7.0	線状	押出	四角	直線 (放射状)	有?	上下左右	I M17		I C2b
12	10.1	6.3	0.3	6.0	線状	押出	四角	直線 (放射状)	有	上下左右	I M17		I C2b
13	8.9	6.8	0.6	12.6	押出	押出	横一文字	直線 (横一直)	有	上下	I M25		II A1 c

これらの特徴を上記の4種に当てはめると、まずI A(つり目)では「I A1a-1」(1・2)と、「I A2-1a-1」(3)、「I A0a-1」(4)の3つに細分される。すなわち頭髪は「左右分け曲線タイプ」に限られるものの、口に関しては「横一文字」と「四角」「不明瞭」という3つが混在している。なお、I A類には比較的大型品が多く、全長11cm前後、幅約7cm、重さ17g前後をはかる。

I B(ひら目)には「I B0a-1」(5)と、「I B1a-2」(6・7)の2つがある。すなわち口の表現が不明瞭で頭髪が「左右分け曲線タイプ」と、口が「横一文字」で頭髪が「左右分け直線タイプ」の2つである。なお両タイプでは規模の差が大きく、前者は全長13.0cm、幅8.7cm、重さ25.9gとすこぶる大型だが、後者は全長約10.5cm、幅約7cm、重さ11gと比較的小振りである。

I C(ほそ目)は、「I C2-2b」(8~12)の1タイプに限られている。すなわち四角い口(2-2)と頭髪や髭を放射状の直線(b)で表現するのが特徴である。また、他の金具が上下一対しか釘穴を持たないのに対し、I Cでは両側の耳部にも一对の穴が穿たれており、計4個の釘穴を有することも特徴の一つといえる。なおI Cも規格の差が大きく、8は全長12.5cm、幅7.5cm、重さ13.2gと大型だが、12は全長10.1cm、幅6.3cm、重さ6.0gと小振りである。

II A(ウサギ耳)は、「II A1c」(13)である。すなわちウサギ耳とともに頭髪を横一直線(c)で表現するのが本形式の大きな特徴である。全長8.9cm、幅6.8cm、重さ12.6gをはかるが、1点のみの観察でありII Aとしての詳細は、今後の検討課題である。

以上の作業により、喇嘛洞墓出土の「人面飾金具」は4種に分類できたが、それらが出土した墓との対応関係を検討してみると、一定のまとまりを認めることができる。このうち最も特徴的なことは、I C(ほそ目)の5点(8~12)いずれもが、M17という同一墓から出土しているという事実である。またI A(つり目)のうち口を一文字に作る「I A1a-1」の2点(1・2)も、共にM10墓からの出土品である。その他「I A2-1a-1」(3)はM5墓、「I B1a-1」(5)はM6墓、「I B1a-2」(6)はM16墓、「II A1c」(13)はM25墓と、それぞれの形式が異なる墓から出土している。たしかにM17・M10墓以外の例が、それぞれ1例のみの対応であることや、

「IB1a-2」(6・7)の2点は同一分類にも関わらず異なる墓から出土しているなど、なお検討すべき点も残る。このことについては、後節であらためて触れることとしたい。

3 人面飾金具の使途

喇嘛洞墓出土の「人面飾金具」が、どのような目的で用いられたのかを検討してみよう。その手がかりになるのは、遺物そのものに残された使用の痕跡であり、遺構からの出土状況である。まず遺物そのものに残された痕跡を探てみると、人面を表現した薄い銅板の上下に穿たれた一对の釘穴に注目できる。とくに頭部にあたる部分には、釘穴を受ける突起まで作り出されており、この金具を何かに打ち付けたであろうことは容易に想像できる。またIC(ほそ目)では、さらに両耳の部分にも一对の釘穴があるから、この金具ではより強固に固定されたであろう。

ではこの金具が、どこに打ち付けられたのかという問いには、出土状況が答えてくれる。先述したように調査者は「もとは棺内の両側板上に釘で打ち付けられていたのであろう」と推定するように、M5墓の木棺内からは、人面飾金具が頭部付近の両側壁に接するようにおのおの数点が出土している。それは、埋葬者の頭部から胸部付近の棺の両側板内面に打ち込まれていた飾金具が、釘や棺材そのものの腐朽によって落下した状況を物語るようである。本来的には、各面に3～5枚の金具が棺の側板に打ち込まれていたのであろうが、単にそれのみが打ち付けられていたとは考えがたい。おそらく何かを棺壁に留めるために用いられた金具であったろう。

では、何を留めるために打ち付けられたのか。それを暗示させるのが資料2の裏面に付着した布の痕跡である。錆着によってごく部分的に残された痕跡であるが、これにより金具が、布を留めるために用いられた可能性を推定させる。

残念ながら棺内には、布などの有機質遺物は残存していなかった。しかしだからといって埋葬時に使用されなかったとはいえない。むしろ金具に残るわずかな痕跡こそ、布の使用を示すものとして注目したい。そもそも死者の遺骸を墓に葬る際、裸で葬ることはまずないだ

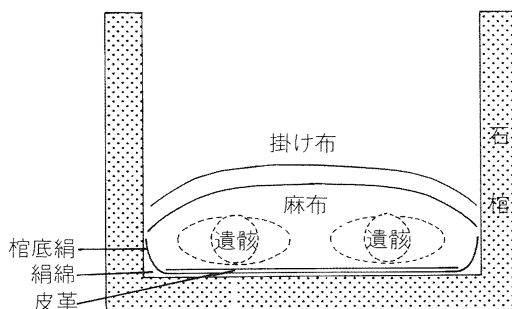


図3 藤ノ木古墳石棺内の繊維遺物配置模式図(角山1993に拠る)

ろう。日本の「斑鳩・藤ノ木古墳」の被葬者は、豪華な布(角山1995)に何枚もくるまれていた(図3)。おそらく喇嘛洞墓の被葬者も何枚かの布にくるまれており、その最後の一枚(掛け布)が死者の顔を覆うように掛けられる時、布の両端が棺の内壁に釘留めされたのではなかろうか。それにより掛け布が直接的に死者の顔に触れないであろうし、さらには頭部から胸部にかけて幾ばくかの間隙が生ずる効果も期待されたのではなかろうか。

以上、空想に空想を重ねたきらいはあるが、人面飾金具の使途としては当たらずとも遠からずと思う。では、前節で検討した各種の形式差は何を物語るのか。以下、小文のまとめをかねて「人面飾金具」の性格を検討してみたい。

4 人面飾金具の性格－まとめにかえて－

棺に納められた死者を覆う掛け布、その布の両端を棺の側板に釘留めする荘厳具の一つが、この「人面飾金具」ではないかと推定した。先に検討したように、この金具は「小判形つり目(I A)」、「小判形ひら目(I B)」、「小判形ほそ目(I C)」、「ウサギ耳つり目(II A)」の4つに分類できた。そしてごく一部の例外を除き、それぞれが納められた墓と対応していることもうかがえた。すなわちM5墓にはI Aが、M6・M16墓にはI Bが、M17墓にはI Cが、そしてM25墓にはII Aが対応する。唯一の例外はM10墓で、I AとI Bの両種が納められていた。M17墓を除いて検討資料数の少ないことがやや気になるが、それでも各墓にそれぞれ特有の「人面飾金具」が納められているという傾向は、ほぼ指摘できるのではなかろうか。

おそらく被葬者が属する「家族」ないし「一族」に固有のデザインを持つ「人面」があり、それが死者の荘厳に用いられたのではなかろうか。このような推定が許されるなら、類似の「人面飾金具」を出土する墓同士は、近い血縁関係を有する可能性もある。とくにI AとI Bは類似点が多い。今後の重要な検討課題といえるだろう。

棺に納めた死者を荘厳する掛け布、顔を覆い隠すであろう最後のその一枚は、軽く遺骸から浮かすように両端を木棺に釘留めする。死者に最後の別れを告げながら「人面飾金具」を打ち付ける血族・婚族の男女たち。またそれ以外にも関係の会葬者が参加したかも知れない。中には自分の「人面飾金具」を用いた「例外者」がいたかも知れない(M10墓)。ともあれ北票喇嘛洞墓地には、「つり目」一族、「ひら目」一族、「ほそ目」一族、「ウサギ耳」一族を代表した「族長・家長」たちが葬られていたのである。

(2005.9.9 重陽節稿了)

引用・参考文献

遼寧省文物考古研究所 2002 『三燕文物精粹』 遼寧人民出版社

田立坤・李智 1994 「朝陽発掘の三燕文化遺物及相關問題」『文物』1994年第11期 pp.20-32 文物出版社

角山幸洋 1993 「繊維－織物・組紐－」『斑鳩藤ノ木古墳第二・三次調査報書(分析と技術編)』橿原考古学研究所編